

福岡県の分譲集合住宅における和室の設置状況について

Present Situation of “Tatami-Room” Planning on Condominium in Fukuoka

○ 和間美月^{*1}, 西田航^{*1}, 西村幸太^{*2}, 柴田建^{*3}, 鈴木義弘^{*4}

WAMA Mizuki^{*1}, NISHIDA Wataru^{*1}, NISHIMURA Kota^{*2}, SHIBATA Ken^{*3}, SUZUKI Yoshihiro^{*4}

This is a study that analyzed and considered the setting situation of “Tatami-room” planning supplied to the Fukuoka prefecture after 2000. The installation rate of “Tatami-room” planning is about 70%, and it is a preservation tendency. However, “Tatami-room” is decreasing rapidly from around 2010. We also clarified that the relationship with the number of rooms and the characteristics of the plan configuration are changing significantly over time.

キーワード：和室, LDK, 平面構成, 集合住宅

Keywords : “Tatami-room”, Living Dining Kitchen, Plan type, Apartment houses

1. 序

これまで筆者らは、和室（タタミ室）の存亡についての研究を行ってきており、かねてから広く普及してきた座敷と次の間からなる続き間座敷の供給は急速に減少し、床の間をもたない和室のみの場合が標準化していること、また平面構成も居間（リビング）との和洋続き間が主流となっており、和室は家族共用空間である居間の補完的役割を担う空間へと変容していることなどを明らかにした^{文1)}。また、日本建築学会においても、2016年度から「日本住宅和室の世界遺産的価値特別調査委員会」が設置され、領域横断的な議論・検証が行われているところである^{文2)}。これらの対象として俎上にあがるのは、もっぱら戸建住宅であり、集合住宅における和室の供給実態や平面構成の分析はほとんどみられてはいない^{注1)}。独立住宅に比べて集合住宅の和室は、設置率が低いのではないかと仮説をたてることができる^{注2)}。その根拠は、面積水準は相対的に低く、一般に限られた間口と矩形の住戸の中での平面計画がなされるという制約や、立地特性

ともあわせてイス坐家具の普及^{注3)}による都市的な住生活様式を志向するものと想定できるためである。しかしこのような観測は正しいものかについて筆者らは懐疑的であり、その検証は不可欠なため、その足がかりとして、九州における中核的な自治体である福岡県内における分譲集合住宅についての供給状況についてのデータ収集を行った。

表1 調査概要

調査期間	2016年7月～8月、2018年5～8月、2019年4月
調査対象	不動産情報サイト「at home」より収集できる 2000年以降に竣工した福岡県内の分譲集合住宅
有効件数	876戸
無効票	①重複事例 ②延床面積50m ² 未満 ③ワンルーム ④メゾネット

表2 階数の概要

総数	階数					(階数)
	1~5	6~10	11~15	16~20	21~	
876	64	355	366	32	59	
100.0	7.3	40.5	41.8	3.7	6.7	

Graduate School of Eng., Oita Univ.

Faculty of Eng., Oita Univ.

Associate Professor, Architectural Division, Oita Univ., D. Eng.

Professor, Architectural Division, Oita Univ., Ph. D.

*1 大分大学 大学院 工学研究科 博士前期課程

*2 大分大学 工学部 福祉環境工学科 建築コース

*3 大分大学 理工学部 創生工学科 准教授・博士（工学）

*4 大分大学 理工学部 創生工学科 教授・博士（人間環境学）

これから住宅計画を展望するうえで、とりわけ集合住宅における和室の動向を明らかにすることは、極めて重要であるという認識に基づいて、その設置状況について分析考察を行うものである。

2. 研究の方法

研究対象のデータはインターネットの不動産情報サイト^{注4)}を用いて収集した(表1)。予備的に実施した2016年7月～8月と、2018年5～8月の本調査、および、2019年4月の補充調査^{注5)}により、福岡県内の分譲集合住宅について、所在地・面積情報などとともに、プランから読み取ることのできる情報を抽出して集計を行ったものである。なお、有効データについては、建設年次2000年以降のものとした。竣工当時の平面構成を分析するために、内部改修の施される平均年数24年(国交省「平成26年度住宅市場動向調査」)を考慮したためである。

集合住宅における和室の存亡について探究するという本研究は基礎的な段階であるが、基本的な着目点はまず和室の供給実態の分析である。具体的には、和室の設置の有無、平面構成、住戸配置による相違の3項目について、これに経年変化、住戸面積水準ないしは居室数、LDKや洋室などの他の居室との関係、和室が外縁部にあるか内包されているかなどの平面計画上の特徴などをカテゴライズして加えて、それらのクロス分析を通じて、この20年間の考察を行っている。

3. 研究対象住宅の和室の概要

3.1 対象住戸・住棟の概要

研究対象とした分譲集合住宅住戸平面データは876戸で、所在地は福岡市615戸、北九州市120戸、その他の市町村141戸である。その平均延床面積84.7m²、居室数(LDKを1室として他の居室との合計)は平均4.2室であった。住棟について付言すると(表2)、階数は6-10階建(40.5%)と11-15階建(41.8%)で8割超(82.3%)を占めている。

採取した住戸平面のサンプル数、すなわち、根拠データによる流通量の経時的変化をみると(図1)、2009年から大幅に減少に転じ、2016年になって回復の兆しを見せている。

3.2 和室の設置状況と採否の要因の経時変化

①和室設置率

和室の設置率は約7割(69.2%)に配置されており、2005年まででは8割以上を占めていた。その後の減少傾向が顕著で、2010年以降は和室の有無がほぼ半数前後で推移するに至っている(図1)。また、和室を2室有す

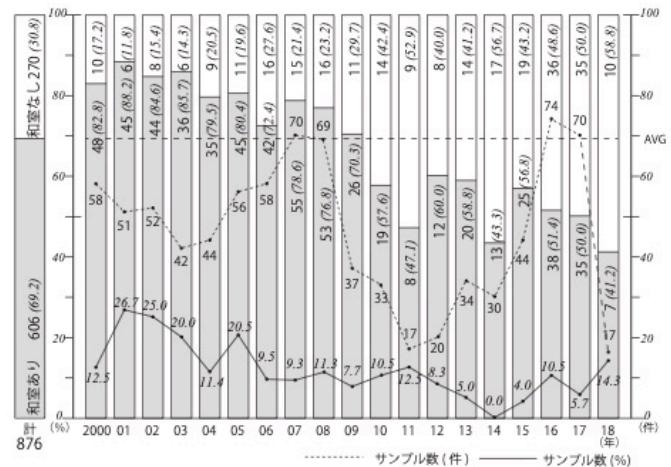


図1 和室設置率とサンプル数の経時的変化

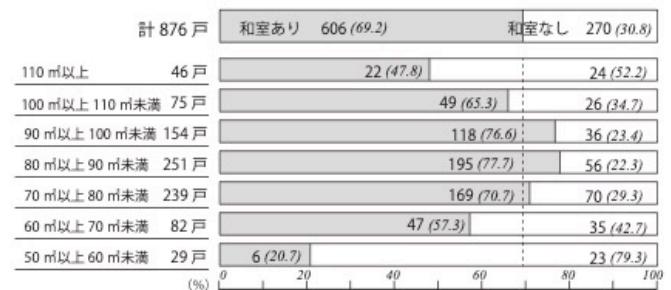


図2 延床面積と和室設置率

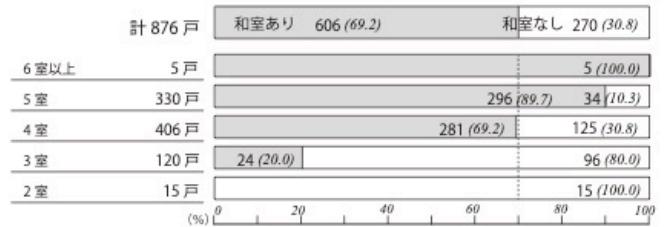


図3 居室数と和室設置率

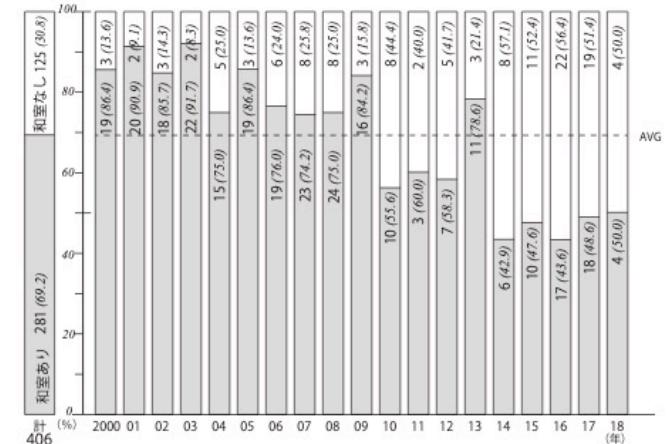


図4 居室数4室タイプに限った和室設置率の経時的変化

る住戸は3戸のみであった。すなわち、「和室は消滅しつつある」とはいいがたいことをまずは特筆しておきたいのだが、しかし、和室の減少がこの10年で加速していることに対しては、傾向の認識だけではなく、社会・経済学的な背景を含めた要因の究明^{注6)}も求められる。

② 延床面積・居室数との関係

戸建住宅の場合には先行研究において、和室の設置率は住戸の延床面積の上昇に顕著に相関することを指摘した^{文1)}。しかしながら、本稿のデータでは、70~90 m²台において平均を上回るが、これより狭くても広くなても設置率は低下している(図2)。これに対して居室数に着目すると、和室設置率と室数の強い関係性が認められる。5室タイプでは設置率が89.7%なのに対して、3室タイプでは20.0%と極めて対照的であること(図3)、4室タイプではその中間の数値(69.2%)であるという明確な相関が指摘できる。とはいえ、この条件も経時的变化が著しく、4室タイプのみを抽出して推移をみると(図4)、2000年の初期10年には、8割を大きく上回っていたが、この数年ではこれが半数を下回る状況となっている。すなわち、居室数4室を確保した場合には少なくとも和室1室設けるという状況にあったものが、和室の採否を左右する境界条件に変化しているのである。

③ LDK面積と和室設置の関係

和室の設置率とLDK面積の関係をとらえると(図5)、LDK面積15 m²~17 m²台では8割前後であるが、18~22 m²に拡大すると設置率6割程度となり、さらに23 m²台・24 m²台・25 m²以上に対応して和室設置率は段階的に減少している。前述の通り延床面積とは単純には対応しないことを考え合わせるならば、和室設置とLDK面積の増減には、どちらを優先するかというトレードオフ関係にあることが指摘できるのである。

④ 和室の広さ

和室の広さ^{注7)}についてみると、全世帯の約7割が6帖大である。2000年には9割、その後は漸減しながらもほぼ6帖大が支配的であったのだが、これに代わって、2013年に半数を超えるまでに4帖半の占める割合が上昇したこと、近年の変容の特筆点である(図6)。

⑤ 所在地による特徴

所在地によって和室の設置率を大別すると、福岡市64.4%、北九州市82.5%、その他78.7%であり(図7)、特に福岡市においてこの約20年間のうちの後半で非設置化傾向が顕著である(図8)。北九州市とその他では、減少傾向ではあるが、依然として高い設置率が確認できる。

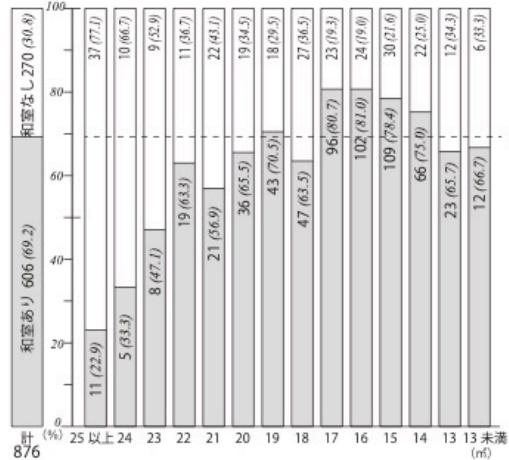


図5 LDK面積と和室設置率

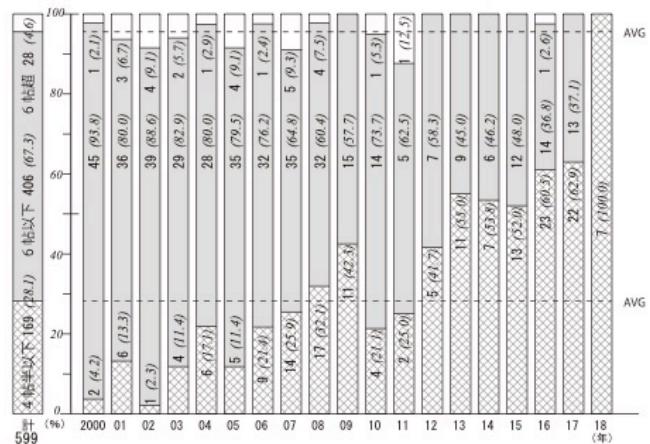


図6 和室の広さの経時的变化

所在地	計 876 戸	
	和室あり 606 (69.2)	和室なし 270 (30.8)
福岡市	615 戸	396 (64.4) 219 (35.6)
北九州市	120 戸	99 (82.5) 21 (17.5)
その他	141 戸	111 (78.7) 30 (21.3)

図7 所在地別和室設置率

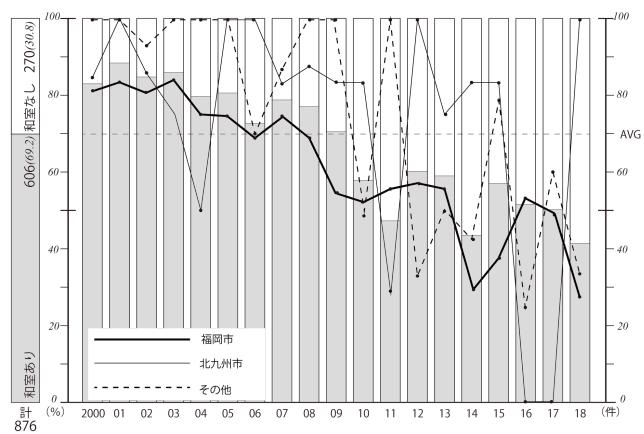


図8 所在地別和室設置率の経時的变化

3.3 和室に付随する空間構成要素

a. 床の間

床の間の設置率は 13.1%であるが、2006 年以降で単純平均すると 8.5%となっており、それ以前では約 2 割（19.5%）であったことと比較すれば、著しく減少に拍車がかかっている（図 9）。

和室の広さが 4 帖半においては 4.8%にとどまり、6 帖を超える 28 戸では 39.3%みられる（図 10）ことなど、和室の居室水準と床の間設置の関係性は不可分ではないことが明らかである。

b. 押入

先行研究において調査した和室の用途は、接客（来客の応対や宿泊）、家族寝室、家事空間、子どもの遊ぶ空間など多岐にわたっており、このような転用性のある和室用途の自由度を確保する上で、押入の有無は極めて重要な構成要素であると考えることができる。この押入のない住戸はわずか（2.0%）で、間口一間に 63.3%，一間を超えるものが 21.5%であるが、近年では縮小傾向にあり、間口一間未満の比率が高まっている（図 11）。

4. 住戸平面構成と和室の関係

4.1 和室の配置と LDK との位置関係による特徴

和室は住戸のどの位置に設けられるか。一般的には南面のバルコニー側にあれば好ましい室内環境を確保できる（眺望、温熱・採光・通風など）といえる。この場合、家族共用空間である LDK との関係性が課題となろう。限られた間口寸法のなかで和室とのトレードオフが生じることになる。LDK 空間をより重要視するならば、和室はバルコニーとは接しない配置が採用されることが考えられる。その一方で、和室へ直接アプローチできるか、LDK を経由せねばならないかという動線の条件も、居室の性格を決定する要素となることが指摘される。

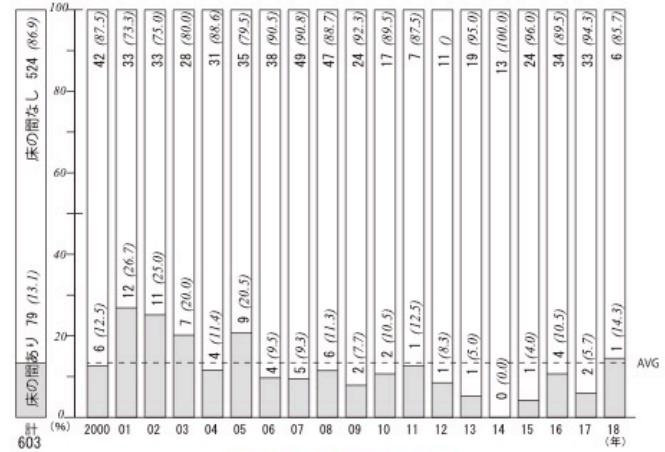


図 9 床の間設置率の経時的变化



図 10 和室の広さと床の間設置率

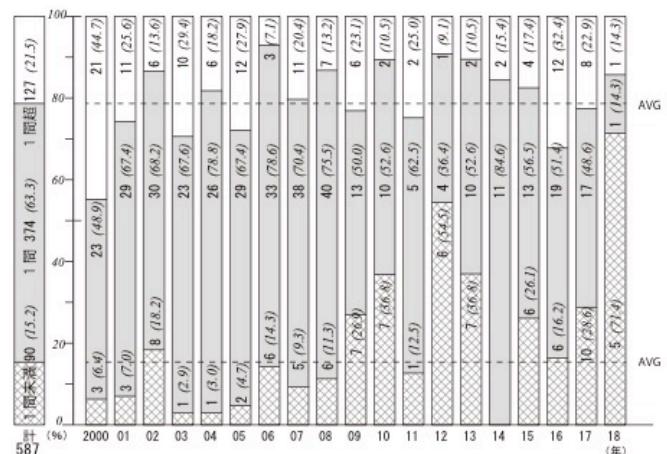


図 11 押入間口の経時変化

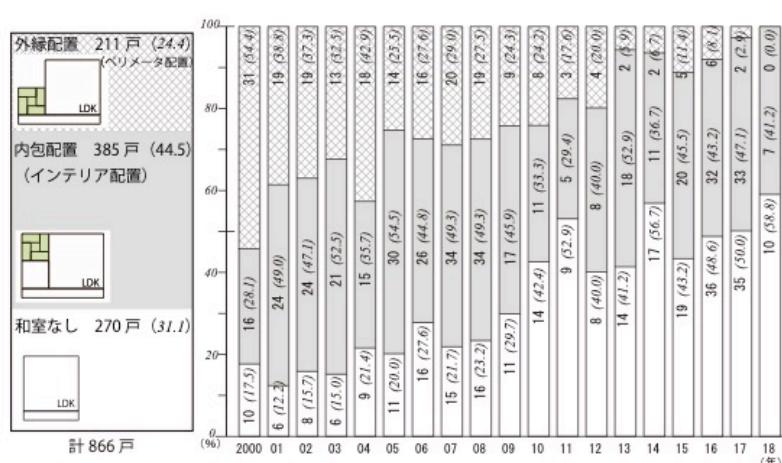


図 12 和室の配置の経時的变化

平面構成における特徴、すなわち和室は住戸にどう配置されているのかについての分析を加える（図12）。

集合住宅の住戸形状は単純化するならば、短手の間口方向と長手の平行方向の矩形が共用廊下に沿って構成されているとして、和室の配置を下記の2タイプに分類して分析を試みた。

a.「外縁配置（ペリメータ配置）」（事例：図13）^{注9)}

：和室がエントランスとは対置する間口方向外壁側に配置されているタイプ（主としてバルコニー側）

b.「内包配置（インテリア配置）」（事例：図14）

：和室が間口方向外壁側に配置されていないタイプ

「ペリメータ配置」：「インテリア配置」はおおむね1:2の割合であり、経時的には、前者から後者へと配置の構成が移行している。延床面積や居室数と和室配置との相関はみられないが、LDK面積とは顕著な関係があらわれており、LDK 14m²未満では半数以上で「ペリメータ配置」が採られている（図15）。

この点に着目するならば、和室に対して LDK 空間の居室水準向上が優先される傾向が高まっていると考えることができる。

和室の広さについて和室の配置別にみると、「ペリメータ配置」は4帖半以下の和室が1割（10.5%）であるのに対し「インテリア配置」は4帖半以下が4割であった（図16）。和室をバルコニー側に設ける場合は6帖以上と広い和室が多く、配置および面積水準のいづれにおいても和室の居室環境を重視している。



図13 外縁（ペリメータ）

配置の事例

<福岡市博多区 2008>

18.5.11 採取

図14 内包（インテリア）

配置の事例

<福岡市西区 2017>

18.5.23 採取

4.2 洋式居室を含めた相互関係による特徴

しかし、前項で示した和室の LDK 空間との関係では解説はできないことも指摘しておきたい。

洋式居室を含めた相互関係^{注8)}についてみると、和室の「インテリア配置」のうち、約4割が洋式居室を外縁に配置している（事例：図17）。また、和室が「ペリメータ配置」で、LDK空間に加えてさらに洋式居室が間口

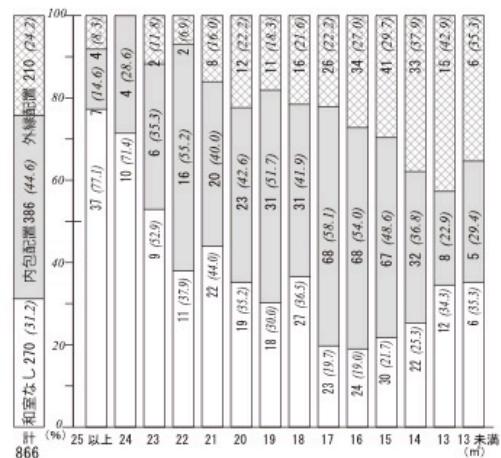


図15 和室の配置と LDK 面積

計 603 戸	6畳超 28 (4.6)	6畳以下 406 (67.3)	4畳半以下 169 (28.1)
外縁配置 (ペリメータ配置)	210 戸	21 (10.0)	22 (10.5)
内包配置 (インテリア配置)	386 戸	7 (1.8)	232 (60.1)
廊下接続	7 戸	7 (100.0)	

図16 和室の配置と広さ

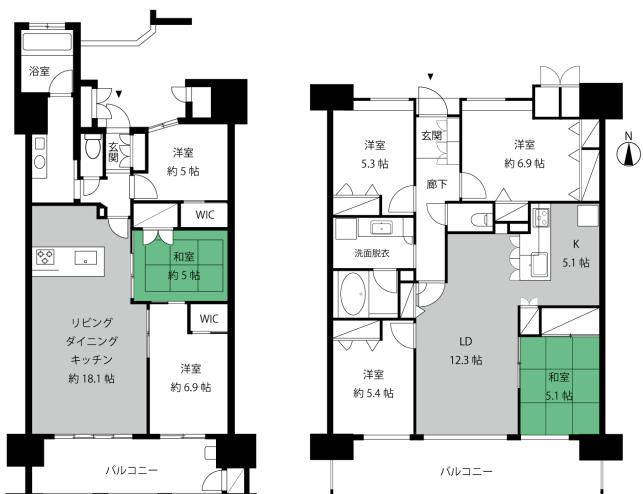


図17 外縁（ペリメータ）

配置・外縁2室の事例

<北九州市門司区 2013>

18.8.6 採取

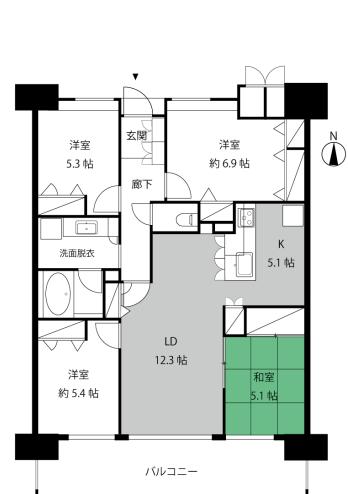


図18 内包（インテリア）

配置・外縁3室の事例

<福岡市東区 2016>

18.7.27 採取

方向に設けている住戸が4割みられ(事例:図18),「和室なし」では、外縁部の洋式居室は半数を上回っている(事例:図19)。

すなわち、家族共用空間の拡充だけでなく、洋室居室のペリメータ配置とプライバシー確保、和室の独立性など、これらの相互関係の中で、和室の存否や配置が決められているととらえることができる(図20)。

4.3 和室への動線について

前述した和室への動線計画(LDK空間からのみのアプローチ「一方向」か、これとは別に廊下からもアプローチできる「双方向」)で分析を加えると(図20)、「ペリメータ配置」の場合には「双方向」アプローチする事例は僅少で、「インテリア配置」の約3割(27.5%)が「双方向」である。

すなわち、和室への単独アプローチを可能とするために「インテリア配置」で計画するということも、和室の内包化の一要因として挙げられる。

5. 住戸配置と和室の関係

5.1 住戸配置と和室の配置について

住戸が「角部屋」か否かによっても、開口部確保の自由度は大幅に異なってくる。その理由は、前章で分析考察を行った和室の配置において、「インテリア配置」であっても「角部屋」であれば、外気に接する開口部の確保は可能であるので、これが平面計画を決定する主要因となり得るかの検証も必要なためである。

前章でも述べたように和室の内包配置が必ずしもLDKの居住環境を良くすることではなく、洋室を南面化させるタイプも多いため、一面開口か、二面開口かということが大きく関わる。

集合住宅の住戸配置を、建物の端にあり桁行方向の片側の壁が他の住戸と接していない部屋を「角部屋」、桁行方向の両方の壁が他の住戸と接している部屋を「中部屋」とし、2つに類型する。「角部屋」と「中部屋」の比率はおよそ3:2で(図21)、「角部屋」のプランがやや上回っている。

二面開口であれば「インテリア配置」でも窓を設置することができるため、「中部屋」と比較して「インテリア配置」がとられる場合が多いと考察されるが、両者の比率はほとんど差異がみられなかった(図22)。

5.2 平面構成と和室の開口部の関係について

和室を設置している住戸のうち、45.2%(274/606)が和室に窓を設けており(図21)、住戸配置ごとにみると、「角部屋」は半数、「中部屋」は約3割であった。

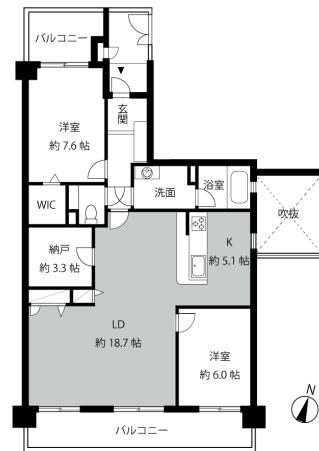


図19 和室なし・外縁2室の事例
<久留米市 2001>

18.5.11 採取

和室の配置	平面構成		外縁部(ペリメータ) 居室数		
	外縁1室	323戸	外縁2室	402戸	外縁3室
外縁配置 (ペリメータ配置) 4 (1.9)	210戸		118 (56.2)	82 (39.0)	
206 (98.1)		凡例 一方向型 双方向型	115 (97.5)	3 (2.5)	1 (1.2)
内包配置 (インテリア配置) 106 (27.5)	386戸	221 (57.3)	152 (39.4)	81 (98.8)	11 (2.8)
280 (72.5)		147 (66.5)	74 (33.5)	120 (78.9)	32 (21.1)
和室なし 270戸		102 (37.8)	132 (48.9)	21 (7.8)	

図20 和室の配置と外縁部居室数および和室へのアプローチの関係

和室の配置	計 876 戸		
	窓あり 274 (31.3)	窓なし 332 (37.9)	和室なし 270 (30.4)
角部屋	503 戸	175 (34.8)	175 (34.8)
中部屋	372 戸	99 (26.6)	157 (42.2)
特殊	1 戸		1 (100.0)
	(%)	0 1 20 40 60 80 100	

図21 住戸配置と和室の窓の有無

和室の配置	平面構成 計 596 戸		
	角部屋 343 戸	中部屋 253 戸	住戸の配置
外縁配置 (ペリメータ配置) 210戸 210戸 (100.0)	外壁に和室が面する場合 和室 ベランダ 外壁面	隣室に和室が面する場合 和室 ベランダ 外壁面	98 戸
内包配置 (インテリア配置) 386 戸	外壁に和室が面する場合 LDK ベランダ 外壁面	隣室に和室が面する場合 LDK ベランダ 外壁面	98 戸 (100.0)
凡例 窓あり 窓なし	59 戸 57 戸 (96.6)	172 戸 231 戸 (34)	155 戸
	57 戸 (24.4)	174 戸 (75.3)	

図22 和室の配置と住戸配置および和室の窓の設置率

屋外に面している位置に部屋をとるプランは、大抵の場合（99.3%）で窓を設けており、「ペリメータ配置」の場合、「角部屋」でも「中部屋」でも和室に窓をとることが基本である。しかし、「インテリア配置」で「角部屋」である場合は、和室が外壁面に面しているかどうかで窓の設置率は異なっている。

「角部屋」の場合、二面もしくは三面が外壁に面するため、間口側方向のバルコニー以外にも窓を設けることができる。「ペリメータ配置」だけでなく「インテリア配置」の場合でも和室に開口部を設置できるため、和室の窓の設置率は高いと推測されるが、「角部屋」343戸のうち和室を屋外に面していない位置にとる場合は172戸と半数を占めており（図22）、「角部屋」だからといって、必ず和室に窓をとるわけではない（事例：図23）。「角部屋」で「インテリア配置」の231戸のうち、窓を設置するプランは24.7%であり（事例：図24）、「角部屋」で「インテリア配置」された和室の開口部設置率は高いとはいえない。

6. 総括

福岡県において供給されている分譲集合住宅において、和室はほぼ消滅しつつあるとはいはず、ここ20年間で7割が和室を設けているという現状にあることを示した。居室数が5室の場合には和室設置率が極めて高く、4室でも同様であったのだが、近年では4室が和室採否の境界となってきており、総じて、和室の設置率、面積水準、平面構成、空間構成要素などにおいて、従来の和室の水準からは明らかに低下していることが示唆される。しかしながら一方で、和室を温存・継承する志向も認められ、和室の自由度が集合住宅での温存傾向に反映していると考察される。

和室であっても机を設置したイス坐の場合や、フローリング床の寝室に布団を敷いて寝起きしている場合、また、リビングルームにソファをしつらえながらユカ坐で生活する場合など、空間と生活の対応は様々であるため、その有用性を考察するならば、移動家具や布団類などを「しつらえる」ことによる機能の融通性・転用性が挙げられ、限られた広さでも共用空間だけでなく私室としての生活行為を許容するという面積効率が集合住宅の場合により効果的ではないかと解釈することもできる。

とはいえる、設置率とは相反して、和室へはリビングルームからしかアプローチできない一方向型の動線が多いことからも計画意図がLDKの補助空間化していると捉えられる点からみれば、有用性は限定的であるとも考えられ、対症療法的な計画ではない和室の存在意義を問い合わせ直す必要があるといえる。



図23 角部屋・内包（インテリア）配置

和室に開口部ありの事例

<福岡市中央区 2009>

18.5.25 採取

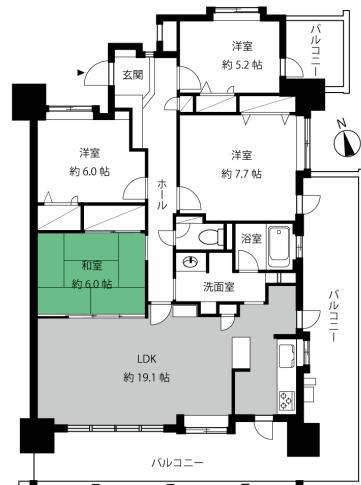


図24 角部屋・内包（インテリア）配置

和室に開口部なしの事例

<福岡市東区 2006>

18.7.30 採取

補注

- 1) たとえば、岸本による近年の論文（参考文献3）において、集合住宅の間取りと居住者の評価に関する成果が公表されているが、分析・評価軸のなかに和室の要素は一切触れられていないことは、そのひとつの証左であろう。また、篠原らの集合住宅研究（参考文献4）において、「和室を持たない住戸が増える一方で、和室を持つ住戸が消滅するわけではない」と述べられはいるが、特定の供給主体による事例考察のとどまっており、統計的な根拠は示されていない。
- 2) この点については、「一戸建て住宅にみられる、和室の減少・リビングの付属室化の傾向は、集合住宅ではより顕著であろう」（参考文献5）などの言及もあり、伝聞的にはしばしば耳にすることである。

- 3) かつて筆者らが郊外型団地の独立住宅において実施した保有家具の調査（95戸）では（参考文献6），ダイニングテーブルの所有率96.8%，ソファ／安楽椅子の所有率89.5%であり，なかには和室にソファをしつらえている事例が6.0%であるが認められた。イス坐化の進行が，すなわち，都市的な住生活様式の志向というには断定的すぎるが，変容傾向的一面ではあると考えている。
- 4) 現在，住宅情報誌など紙媒体の図面掲載数が少なく，有意な件数が得られないこと，また，他の不動産情報サイトに比べ，地方の住戸事例の掲載数が多いことから「at home」によって図面データの収集をおこなった。
- 5) 集合住宅の和室設置状況を概括するため，2016年度に九州の中核的都市である福岡市の中央区（市街地中心部）と早良区・西区（郊外部）において本稿と同様の手法でプラン採取（298戸）を実施し，設置率が約7割に達することを確認した。これを予備調査として，2018年度に福岡県全域を対象に本調査（採取プラン566戸）を実施したものである。さらに，本論文の投稿にあたり2018年度データ（12戸）を補充調査として収集した。
- 6) 2010年前後からの和室の設置率低下の傾向は，独立住宅についても同様であり，その要因は単純なものとは考えられないが，極めて重要な課題として究明されるべきであろう。いくつかの要因をあげるならば，この時期以降の住宅取得層がいわゆる「団塊ジュニア世代」（1971-1974年生まれ）と重複する点である。山田昌弘，三浦展，内田樹らによる多くの著作（参考文献7～14）を参考にしてその世代像を概括すると，パラサイト化（非婚化・晩婚化と親世帯同居），消費行動の個別化（情報機器・コンビニエンスストアやファミリーレストランの普及）などとの関係性が指摘できる。また，リーマンショック（2008年9月15日）による強い影響も考えられるなど複合的要因による転換点であるのかも知れず，深く掘り下げた考察を今後の課題としたい。
- 7) 和室面積の内訳を以下に示す。
 「6帖大」6帖超過8帖未満:23戸，8帖超過10帖未満:4戸，10帖:1戸〈計:28戸〉
 「6帖」4.6帖以上5帖未満:24戸，5帖以上6帖未満:85戸，6帖:297戸〈計:406戸〉
 「4.5帖」4.5帖未満:34戸，4.5帖:135戸〈計:169戸〉
- 8) 外縁配置（ペリメータ配置）のうち外縁4室が8戸，5室が2戸，内包配置（インテリア配置）のうち外縁4室が2戸，和室なしのうち外縁4室が13戸，5室が2戸であった。
- 9) 事例図面は，ウェブサイトより取得した平面図をリライトしたものである。なお，右下に斜体で示す数値はデータ採取日である。また，室名は取得したデータをそのまま転記しているが，ウォーキングクローゼットのみは文字数の関係上「WIC」と書き換えた。

参考文献

- 湯浅裕樹・鈴木義弘ほか：多様化の時代における分譲独立住宅平面構成の経時的比較分析 我が国の独立住宅における住要求に関する研究 その1, 日本建築学会計画系論文集 第78巻, 第690号, pp.1723～1732, 2013年8月
- 日本建築学会：日本建築和室の世界遺産的価値, 特別調査委員会報告書, 2019年3月
- 岸本達也：集合住宅の住戸の間取りと居住者の生活評価の関連性, 日本建築学会計画系論文集, 第84巻, 第755号, pp.65-73, 2019年1月
- 篠原聰子ほか：民間分譲マンションの住戸平面の変遷と共用空間～分譲型集合住宅における平面構成についての研究 その3, 日本建築学会大会学術講演梗概集, 2013年8月, pp.1455-1456
- 住総研：受け継がれる住まい 調査研究委員会『受け継がれる住まい—住居の保存と再生法』, pp.96, 2016年, 柏書房
- 高岡大輔・鈴木義弘・岡俊江ほか：LD空間と和室のしつらえからみた起居様式と和室のとられ方の関係について, 日本建築学会大会学術講演梗概集・E分冊, pp.1391-92, 2012年9月
- 山田昌弘『パラサイト社会のゆくえ』, 2004年, 筑摩書房
- 山田昌弘『希望格差社会』, 2007年, 筑摩書房
- 山田昌弘『少子社会日本』, 2007年, 岩波書店
- 三浦展『ファスト風土化する日本』, 2004年, 洋泉社
- 三浦展『下流社会』, 2005年, 光文社
- 三浦展『日本人はこれから何を買うのか?』, 2013年, 光文社
- 内田樹『下流志向』, 2009年, 講談社
- 小野田泰明・鈴木雅之ほか編著『建築のサプリメント』, pp.10-11, 2015年, 彰国社
- 岡俊江・鈴木義弘ほか：座敷とだんらん空間からみた新築分譲住宅の平面構成の変容過程に関する研究, 日本建築学会大会学術講演梗概集, 2001年8月～2007年8月